

2020. 12. 27. 降誕節第1主日礼拝式説教

聖書：マタイによる2章 1-12節

『わたしたちも拝みに行こう』

今朝ご一緒に読みます聖書箇所は、教会暦に基づく聖書日課で示された聖書箇所です。クリスマスや、クリスマス後の礼拝で読む箇所として毎年のように取り上げられる箇所で、皆さんもよくご存じの聖書箇所です。

さて、ここには、主イエス・キリストがお生まれになった直後のことが描かれています。登場人物は二つのグループの人々です。一つは東方の占星術の学者たち。もう一つは、ユダヤの王ヘロデとエルサレムの律法学者たちエルサレムの人々。この二つのグループの人々のコントラストがここには描かれているのです。

まず、東方の学者たち。東方というのはユダヤから見て東の方という意味で、アラビア、ペルシャの国々のことではなかったか、と想像できますが、何も書かれていなので、よくわからない。しかし、はっきり言えるのは、その時代すぐれた文明、文化があった東方の学者たちであったということです。すぐれた知識人たちということです。その彼らが外国のそれも小さな国の王が生まれたからといってはるばる旅してくるのです。しかも、彼らは王と呼んでいるのですが、星を見て拝みに来た、と言っている。それは、ただちに新しい国王が生まれた儀礼行為ではなく、救い主の誕生ということを学者たちが受け止めていたことを物語っています。すぐれた知識人である学者たち、いわば理の人である彼らが理を超えた救い主の誕生の知らせを信じ受けとめていたのです。

もう一方のグループはヘロデたちです。ユダヤ人たちです。東方の学者たちがエルサレムにやってきて、ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおられますか、と尋ね回っているのを知って、動揺しうろたえるのです。どうしてうろたえたのか、といえば、ヘロデにとってどんなものであれ、自分の地位や存在を脅かすものは、不安の材料となったからです。救い主誕生というような宗教的な伝説があることはヘロデも漏れ聞いていたかもしれないけれど、気にも留めていなかった。だがもしそれが現実のこととなるのなら、当然彼にとって、不安材料になるのです。ヘロデ王は祭司長や律法学者を集め、メシアはどこに生まれるのか、と問い質します。律法学者たちは、聖書の言葉、預言

の言葉を引用して応えます。ユダヤの律法学者たちは知っているのです。生まれるであろう場所も、聖書を読んで知っているのです。ヘロデは律法学者たちの言葉を聞き、エルサレムに來ているという東方の学者たちを呼び寄せ、生まれた時期について確かめます。そして、「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう」と言うのです。そう言ったのは拝もうとする意志があったからではなく、自分も拝みに行くから情報をくれ、ということだった。

さて、こうして二つのグループは出会い、交差します。一方は遠い国からわざわざ生まれた救い主を拝むためにやってきた学者たち。一方は救い主誕生の知らせに動揺しうろたえたヘロデ王をはじめとする人々。

この二つのグループの人々は、確かに交差するのですが、その後互いの違いを鮮明にしていく。一方は救い主を探しあて拝み、一方は救い主のもとに行こうともしないし拝まない、というそれぞれの道を進む違いなのです。

この救い主を拝むのか、拝まないのか、それがこの二つのグループの分かれ目になっているのです。

「拝む」という言葉が今日の聖書箇所キーワードになっているのですが、この言葉の意味は拝むだけでは足りない言葉で、ひれ伏して拝む、跪拝するという言葉です。床に頭をつけひれ伏して拝む、ということで、その意味では11節は同意語反復のようにひれ伏して、ひれ伏し拝むという具合に使われています。

「ひれ伏す」という態度行動は、拝む対象の前で、自分は小さな、低い、貧しい存在です、取るに足りない存在です、ということであらわす態度です。それは、わかりやすく言えば、拝む対象の前であなたは大きい、わたしは小さい、と言って自分を小さくすることです。自分を小さくすることとは、自分の思い、理屈、自分の感覚、自分の理解、自分の納得、そういうものが神の前では小さい、ということを経験的に認めることです。ちょっと小さいのではない。限りなく小さい、ということを経験していく。だからこそ、神さまあなたの御心のままに、あなたの言葉に聞き従っていきます、それが「ひれ伏して拝む」という言葉に込められている態度です。

東方の学者たちは、遠くの国からユダヤで生まれた救い主をひれ伏して拝

むためにはるばる旅して来たのでした。この行動の全部が、ひれ伏して拝むということに結びついているような態度です。しかも彼らは、東方の学者であり、当時のもっともすぐれた知性の持ち主たちでした。その彼らが自分たちの知性を超えた方の存在を受けとめ、ひれ伏して拝むためにやってくるのです。

一方ヘロデ王、またユダヤの宗教的な権力者たちは、聖書（つまり旧約聖書）のことをよくよく知っている人たちでした。救い主のことも、彼らは知らないはずもなかった。しかし、ひれ伏して拝む気持ちも、そもそも会うという気持ちもなかった。なぜなら、自分の方が大きくなっているからです。不安材料ではあった。しかし、ヘロデは自分の方が大きい存在だと思っていた。ヘロデは王として自分が救い主の前で小さくなる気持ちなど毛頭なく、自分の存在を脅かすものなら、断固として処分しなければならないと考えていた。それはまさに上から目線。自分を大きなものとしているのです。

東方の学者たちは、星に導かれ、幼子誕生の場所へとたどり着くことができました。幼子は母マリアと共にいたのですが、彼らはひざまずき、ひれ伏して伏し拝んだ。まさに自分を小さくしようとしているのです。そして黄金、乳香、没薬、といった贈り物を献げた。どれも当時としての貴重なもの、自分たちの持てるよきものを差し出したのです。そして自分たちの国へ帰っていった。なんという人たちか、と思います。ただ拝むために来て、精いっぱい贈り物をささげ、喜びのうちに自分の生活の場に帰っていく。それも、一般的に言えば、外国の神なのです。それは当時ありえないことと言っていることでした。クリスマスというのは直訳すればキリストのミサ、キリスト礼拝ということですが、最初にキリスト礼拝をしたのは、まさにこの東方の学者たちであったのです。

今日の聖書箇所が最初に申し上げたように、二つのグループのコントラスト・対比を描いているのは、最終的にわたしたちにとってもシンプルなことを語りかけているのだ、と思います。

あなたは東方の学者たちのように、主イエス・キリストの前でひれ伏して拝む人、そこから生きる人ですか。それとも、ヘロデ王のように、エルサレムの権力者のように救い主を拝まない人ですか、と問いかけているのです。

あなたは東方の学者たちのように、神の独り子の前で自分を小さいものと受け止め、事実自分を小さくして、キリストの大きさの前でひれ伏す人ですか。

それとも、ヘロデのように、自分を小さくすることが嫌いで、ひれ伏すなん

てことはとんでもないことで、ふんぞり返って、自分の思いや理屈や納得の中に閉じこもっていたい人ですか。と問いかけてくるのです。

現実はずっと、複雑で、こんな両極端のような二者択一ではなく、少し拝むけれど、だいたいは拝まない、とか、時々には拝むけれど、ほとんどは拝まないとか、自分の気分のいいときは拝むけれど、そうでないときは拝まない、とか、実にさまざまでしょう。だからこそ、このコントラストの前に立つ必要があるのです。あなたはどちらですか、という問いの前に繰り返し立つ必要があるのです。なぜならわたしたちの腰は放っておけば、どんどん高くなり、気が付くと神に対しても、主イエスに対して、まるで自分のほうが主であるかのように、納得したら信じてもいい、自分が了解したら信じてもいいというような主客の逆転が起こっていくからです。

最初のクリスマス、キリスト礼拝をした人たちがいた、ということに目を向けたと思います。人間の知恵や理を超えて、働き給う神の前でただひれ伏して、神のなさる恵みの業を喜びのうちに感謝し、拝礼した人たちがいたことに目を向けたと思います。